

早稲田大学博士論文(審査報告書)		
	学位記	文科省報告
2008	4885	甲 2704

博士論文審査要旨

山口正樹氏論文題目

「初期近代における方法の概念の誕生と知恵の伝統」  
——ホッブズとヴィーコを中心にして——

早稲田大学  
大学院政治学研究科

## 1 論文の構成

本論文は、A4横書きで297頁、36万字を超える大部な研究である。

その構成は以下のようになっている。

序文

序論 近代政治学における方法の問題

第1節 ホッブズにおける政治の科学化

第2節 ヴィーコの実践哲学—古代人と近代人の学問の和解を目指して

第一部 近代学問理念の方法と論理

第一章 近代学問理念の形成と方法の問題

第1節 初期近代における方法の概念の史的展開

第2節 ベーコンにおける論理学と弁論術—ベーコンにおける学問の分類

第3節 デカルトの新しい学問理念—『精神指導の規則』におけるデカルトの方法について

第4節 ホッブズにおける機械論的人間観の成立

第二章 ホッブズ哲学の方法と論理

序 ホッブズ哲学における方法の概念

第1節 古代ギリシャにおける分析（解析）—総合の方法の歴史的背景について

第2節 17世紀ヨーロッパにおける代数解析の理念

第3節 ホッブズ方法論における分析・総合の概念について—パドゥア学派とガリレオの影響

第4節 ホッブズ哲学における唯物論の影響

第二部 初期近代ヨーロッパにおける統治の技法

第三章 ホッブズと近代国家概念の成立

第1節 ホッブズ政治哲学の方法と論理

第2節 ホッブズの機械論的人間観

第3節 ホッブズの政治哲学—人為的人格としての国家の論理

第4節 ホッブズと人文主義の技法—科学とレトリックの間で

#### 第四章 ヴィーコにおける新しい学問の方法と知恵の伝統

第1節 ヴィーコにおける学問教育の理念

第2節 ヴィーコ哲学の方法と論理

第3節 ヴィーコの『新しい学』と文明神学—政治の詩的起源とその歴史的視座について

第4節 ヴィーコの古代統治論—ヴィーコにおける国家理性の概念をめぐって

第5節 ヴィーコと知恵の伝統—プラトンとキケロをめぐって

結論 ヴィーコの詩学—知とヴィジョンについて

テキスト・参考文献

## 2 論文の概要

本論文は、ヨーロッパの近代初期に現れた「方法の概念」の史的考察を通じて、古典的政治哲学の近代的転換と、その転換のもたらした政治学における近代性の孕む問題の克服の可能性を探求しようとするものである。本論文が焦点をあてているのは、科学的な体系として政治学を確立したホッブズ(Thomas Hobbes, 1588-1679)において失われた古典的政治学における対話的実践の契機と、その復権に関して、人文主義的な教養と知恵の伝統をふまえたヴィーコ(Giambattista Vico, 1668-1744)の政治の詩学のアクチュアリティである。まず、第一部の「近代学問理念の方法と論理」において、ホッブズにおける近代政治哲学の成立を、近代初期における方法の概念の展開という文脈の中で明らかにし、次に、第二部の「初期近代ヨーロッパにおける統治の技法」において、ホッブズにおける近代政治哲学としての国家論の近代性を分析し、ヴィーコの思想のなかにその克服の可能性を探求している。

第一部の第一章「近代学問理念の形成と方法の問題」では、最初に、古代ギリシャから中世ヨーロッパにおける方法概念の変遷過程を概観し、近代初期におけるラムス主義の興隆とその論理学の改革について考察される(第1節)。そこでは、ラムス(Petrus Ramus, 1515-72)の論理学の改革が、結果的に、古典的政治学の実践的な説得の技法であった弁論術を中心とする口頭文化の衰

退の最初の契機となったことが明らかにされる。次に、ベーコン(Francis Bacon, 1561-1626)における新しい論理学の構想が考察され、ベーコンの帰納法と自然誌による新論理学(ノヴム・オルガヌム)の構想が、ラムスの論理学改革が未だ提示し得ていなかった自然学の新しい原理を解明する方法の提示であったことが指摘される(第2節)。さらに、『精神指導の規則』を中心的なテキストに据えつつ、デカルト(René Descartes, 1596-1650)における明晰・判明な観念による確実性の探求としての方法が吟味され、懐疑主義の克服をめざして、人間の知覚構造を機械論的に説明したそれが、学問の方法を対話ではなく純粋な理性に基づく機械的な計算としたことが確認される(第3節)。最後に、メルセンヌ・サークルにおけるデカルトとホッブズの知的な交流を踏まえて、そこでの光学実験の成果が、ホッブズの機械論的認識論へと結実したことについて論じられる(第4節)。

第二章「ホッブズ哲学の方法と論理」においては、ホッブズの分析-総合に基づく方法概念の系譜を明らかにするために、古代ギリシャにおける分析-総合の方法の誕生から、17世紀のヴィエト(François Viète, 1540-1603)とデカルトを中心とする代数解析の技法の展開と、パドヴァ学派の分解-構成の方法、そしてガリレオ(Galileo Galilei, 1564-1642)の運動論について考察したうえで、ホッブズの方法概念の構想の特異性が明らかにされる。それによれば、ホッブズの方法概念は、パドヴァ学派とガリレオの分解-合成に基づく運動論と融合しながら、近代の運動学に基づく新しい動的な幾何学の理念を構想していたとされる。さらに、ヴィエト、デカルト、ウォリス(John Wallis, 1616-1703)らとの論争の検討を通じて、ホッブズが、事物の普遍的な原因から結果へと絶え間ない演繹的な推論によって進展していく幾何学的総合の過程こそが推論において何よりも重要であると考えたことが明らかにされる。

第二部では、まず第三章「ホッブズと近代国家概念の成立」において、ホッブズが国家論を構想する際に、人間社会をも幾何学的に構想することを可能にさせた認識の条件を問うことが課題として提示される(第1節)。その条件としてあげられ、分析されるのは、外的対象と想像的空間との区別による二元論、コナトゥスの反作用としての人間の情念の分析、その意志論の分析を通じて得られたホッブズの近代的な人間像の成立である(第2節)。次に、自然状態における万人の万人による戦争状態から、その恐怖から逃れるために、人々が理性的に発見した自然法の命令に従うことによって国家が形成されるプロセスが、人格の概念を媒介しながら考察される(第3節)。そこには、支配する絶対的な主権者とそれに服従する臣民からなる政治秩序が形成されることになり、かつて古典的政治学が有していた賢慮に基づく実践哲学の理念、すなわち、等しき自由な市民が公的な領域の中で、対話と説得による相互の実践を通じて、互いに善き生を求め合うような政治秩序の理念が存在する余地はどこにもないことが指摘される。つまり、ホッブズの政治哲学においては、古典的政治学が有していた実践哲学の意味は完全に変容し、自由な市民の対話的実践を喪失した、支配と服従からなるデファクトな力の関係に政治秩序が還元され

てしまっていることが明らかにされるのである。本章の最後では、そのような政治秩序の中でレトリックが果たす役割が吟味され、それが果たしてキケロに由来する人文主義の伝統につながるものであるのかどうかに関して、スキナー(Quentin Skinner)のホッブズ・レトリック論が批判的に検討される(第4節)。

第四章「ヴィーコにおける新しい学問の方法と知恵の伝統」では、まずヴィーコの人文主義の学問教育理念が概観された後(第1節)、同時代のナポリの自然哲学の興隆という文脈にヴィーコ思想がおかれ、デカルト主義が支配的であったなかで、ヴィーコがその独断主義に対してどのように自らの思索を展開したのかについて、彼の基礎命題である「真なるものは作られたもの」を中心にして考察される(第2節)。あくまで人知の有限性に立つ懐疑主義者としてのヴィーコは、人間の理性の完全性を称揚する独断論の立場を無批判に受け入れることを拒否し、まずは人間の理性およびその認識能力の可能性と限界についての批判的な省察をくわえることの重要性を説き、そこから、自然の事柄について人間の認識は、外的な事物の部分的な把握にとどまるがゆえに、第一真理からの二次的な派生物でしかないとする。それゆえにヴィーコは、自然についての新しい学ではなく、むしろ諸国民の世界についての新しい学の構想を提唱する。なぜなら人間の文明世界こそは我々が作り出したものであり、我々が本当に理解することのできるのは外的な自然の世界ではなく、むしろ我々の作り出した人間の世界だからある。このようにして、いわば発想の転換がヴィーコの主著である『新しい学』の構想につながったことが示される。

次に、この『新しい学』を通じて、ヴィーコの政治哲学の歴史的視座が考察される(第3節)。ここでは、ヴィーコの描く政治の詩的な起源が、ホッブズの自然状態論とともに考察され、それらの間の差異が両者の意志論の差異から説明される。ホッブズにとって意志とは、結局のところ欲求にほかならなかったのに対して、ヴィーコにとってのそれは、人間の情念を昇華しながらそれを人間社会における正義へと向けさせる力にほかならず、それゆえヴィーコの自由意志は、人類の根源にあるカオスの状態を抜け出し、人々の諸情念を鎮めながら、文明社会の創設のための根源的な基礎となることが示される。またヴィーコが国家理性の概念に影響を受けながら、その古代統治論を展開したことが明らかにされ、その古代統治論に即して、民主制国家の出現が、民衆の自己認識の発展の所産であることの意義が考察される(第4節)。

最後に、ヴィーコが自らの文明社会論を展開するのを可能にしたトピカ的な知恵の伝統が再検討され、まず、プラトンの自己の魂への配慮としての知恵の伝統と、キケロの学識ある弁論家としての知恵の伝統の両方がヴィーコの知恵の概念の根幹となっている可能性が示される(第5節)。プラトン主義者としてのヴィーコの知恵の概念は、他者との対話的実践の交わりの中で自己の無知を自覚し、さらなる人間の完成に向けて思慮の健全さと正義にかなった行動を保つことにほかならず、公的な領域において自由人として振舞うための実践的かつ倫理的な規範となる。またキケロ主義者としてのヴィーコの観点から見れば、知恵ある人とは、個々の特殊な状況に対

して適切に振る舞い、また品位を持って正しく語ることでできる者のことであり、それゆえヴィーコの知恵の概念の中には、公的な場において品位を保ちながら言葉豊かに語るための雄弁の技法が包摂されており、知恵と雄弁の技法は相互に補完し合っている。ここから、ヴィーコにとって知恵の概念が、賢明に語るための説得技法である雄弁の概念と密接に関係し、知恵と雄弁の結合という人文主義の理念の強調に連なることが導かれる。ヴィーコにとって弁論術とは、認識する知と実践する知との両者を併せ持つものでなければならず、それら両者を合わせて初めて、あらゆる知識学芸を言葉豊かにかつ総合的に語るための英知となるのである。言い換えれば、弁論術は、あらゆる理論的知識と実践的な技芸とが統合された万般の豊かな知識、「森羅万象すべての事柄についての知識」となるのである。こうしてヴィーコが、理論的知識と実践的知識を峻別しながら、哲学と雄弁を分離し解体しようとする近代のあらゆる哲学的な試みに対して警鐘を鳴らしたことの意義が明らかにされる。

結論としておかれた「ヴィーコの詩学——知とヴィジョンについて」では、ホッブズの政治学がわれわれに残した理論知と実践知との乖離の問題に焦点を合わせながら、それを乗り越えるための総合的な視点としてのトピカ的な知恵の可能性をヴィーコの中に探ろうとする論者の視点が再確認されている。メタファーとインゲニウム（創意工夫）に基づく人文主義的な知恵の伝統の涵養が、近代知と古代人の知恵との和解を可能にしながら、ホッブズに典型的に現われている近代の統治テクノロジーがもたらした負の遺産を克服することにつながるのではないか、というのがその主張である。

### 3 論文の特徴と評価

本論文では、17世紀の科学革命における方法の概念の誕生をめぐる史的考察を手がかりとしながら、あらゆる世界の対象を量的関係へと還元し、分析・操作しようとする近代知としての方法の概念が、自然的世界のみならず、人びとの意志や情念が支配する政治社会である実践的領域に適用された場合にもたらされる問題について、ホッブズとヴィーコの学問方法の概念を中心に批判的な検討とその克服の可能性が探求されている。とりわけホッブズの政治哲学の中に顕著に見出されるとされる、その問題とは、以下のことである。かつての古典的政治学が理想として掲げた対話的实践の契機を否定することによって手に入れたホッブズの政治学の体系性は、その対象世界を理論的に統制しえたかに見えるにもかかわらず、実際には理論と実践の関係を自らの哲学体系の中で捉え返し、その間隙を埋め合わせる術をもはや持っていないということである。そこで論者は、理論から実践への転換は、ホッブズのように単に道具的かつ技術的な関心のみでは成立せず、ヴィーコが主張したように、どこまでも聴衆を相手にし、実践的に有効な説得の技法としての対話とレトリックの伝統が必要であることを明らかにしようとするのである。この点

に関しては、ハーバーマス(Jürgen Habermas)の古典的な著作である『理論と実践』(1963年)で論じられ、ホップズとヴィーコを論じる際の基本的な視点としてひろく共有されている。

そうした視点に加えて、論者は、啓蒙期のナポリにおいてヴィーコがその著作を通じて実際に何を為そうとしていたのかについての理解の必要性を強調する。というのもヴィーコもまた、ナポリの知識人の集会のみならず、ヨーロッパの文芸共和国における知的交流を通じて、北方の国々からもたらされる新しい科学革命の成果に深い関心を示し、またそうした知的交流を通じて近代的な知の方法(数学的自然学)の有効性と限界に対するすどい洞察力を持ち合わせていたからである。今日のヴィーコ研究は、このようなヴィーコの実像を当時のナポリおよびヨーロッパの知的な文脈の中で考察することでより鮮明に描き出そうとしている。論者によれば、その成果は、マツォータ(Giuseppe Mazzotta)のヴィーコ研究において象徴的に示されており、それは、従来のヴィーコ論においてしばしば見られたように、ヴィーコの基礎命題を中心とする哲学的認識論に終始するのではなく、ヴィーコの詩学を中心テーマに据えながら、歴史文献学、言語学、法学、政治学、神学といった多様なトポスが絡み合ったヴィーコの百科全書的な知の体系の試みを、当時のヨーロッパ思想史の文脈に即して分析し、総合的に捉え返したという点において、近年における画期的なヴィーコ論であったと評価されている。また、かつてのクロッチェ(Benedetto Croce)のヴィーコ論に見られたように、ヴィーコの思想を本質的に政治に無関心なものと思えず従来の見方に反し、マツォータの論考は、当時のナポリの社会的な背景を考慮に入れながら、ヴィーコの思想の核心には教育的な実践的問題があることを強く主張していることも、論者は評価している。そこで本論文は、マツォータにしたがって、ヴィーコの詩学のアクチュアリティを強調しながら、ヴィーコの思想の根幹にある、道具的な理性ではなく、対話的实践を通じて得られる人文主義的な教養の重要性と知恵の伝統を明らかにしようとしたところに、優れた特徴を見出すことができる。

以上のように、本論文は、近代学問の方法論史を概観しつつ、ホップズのうちに近代学問理念の一つの典型を見出し、さらにヴィーコの詩学をホップズの方法論を克服しうる実践的知恵の再興として位置づけようとする試みであるととらえることができる。やや論述が概観的すぎる面もあるが、個々の思想家の方法の要点が手際よく再構成されており、目次構成や各章の論述も含め、全体を通じて申請者の問題関心が素材解釈に一貫して適用されている。とくにヴィーコについては、すでに指摘したように、マツォータを中心として、今日の新しいヴィーコ研究の成果を積極的に生かす努力がなされており、ホップズに関しても、スキナーによるホップズと人文主義的伝統への再着目など、近年の重要な研究成果が、本論文の視座を強化するものとして効果的に組み込まれている。

このように本論文では、ホップズとヴィーコの両者とも近代の立場に立ちながら、ヴィーコがホップズの弱点を克服する立場にあることが説得的に示されているが、なお、方法の違いはある

ものの、自然に対する作為（制作）の優位という点では、古代と近代（ホップズとヴィーコ）の差異とホップズとヴィーコの差異とを比べた場合に、質的にどちらが大きいのかという問いは、本質的な問題として残されているように思われる。また、ヴィーコの方法における実践知については、制作的でありながら道具的ではないメタファーとしての詩を中心に詳しい叙述がなされているが、他方で、この詩的知恵が、ヴィーコにおける修辞術やインゲニウム（創意工夫）といった要素とどのように関連して「ヴィーコの政治学」を形成していくのかについての叙述は、やや手薄にとどまった感が残った。ヴィーコの政治学を描くためには、ホップズの機械論的方法との対比だけでなく、人文主義とヴィーコの関連や、歴史学史のなかでのヴィーコの位置づけをも視野に入れることも必要なのではなかろうか。ただし、これらの点は本論文の欠点というよりも今後の課題として考えられうるものであり、本論文の論旨の明快さを損ねるものではない。

#### 4 結論

本論文は、その形式、論理の展開、参照された文献、それらによって提示された学問的な知見と主張から判断して、博士論文としての条件と水準を十分に満たしているとみなすことができる。論者のホップズとヴィーコの比較研究は、政治哲学の近代性に関する批判的研究において新しい視座を提供するものとして、ひろく今後の政治思想研究に寄与するであろうし、また本論文を出発点として論者自身の今後のさらなる研究の発展が期待される。よって本論文は博士（政治学）の学位を授与するに値するものと認められる。

2008年11月1日

審査員	（主査）早稲田大学教授	佐藤 正志
	早稲田大学教授（Ph. D.）	飯島 昇藏
	早稲田大学教授（博士（政治学））	厚見 恵一郎